

氏名(国籍)	鄭寅汶(韓国) <small>ちよん いん むん</small>		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第2231号		
学位授与年月日	平成18年9月30日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	芥川龍之介文学研究 —テキスト論と作家論とのはざままで—		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	荒木正純
副査	筑波大学教授		名波弘彰
副査	筑波大学教授	博士(文学)	新保邦寛
副査	筑波大学講師		平石典子

論文の内容の要旨

本論文は、芥川研究の伝統的で中心的なあり方、つまり、作品の読みの正解を作家・芥川龍之介の伝記的事実に求めるという歴史実証主義的なあり方を、近年発展してきた文化・文学批評理論、とりわけテキスト論に基づいた作品の読みによって超克しようとするものである。

構成は、以下のとおり。

序章

第一部 芥川文学の〈始発〉の光景と古典

- 第一章 芥川龍之介の描く生の極北と古典 — 「羅生門」論
- 第二章 物化された鼻と〈自我〉の転倒 — 「鼻」における深刻な主題と軽妙な笑い
- 第三章 「芋粥」における光と影
- 第四章 「偷盗」の物語 — うごめく本能の欲望と母への呼び声

第二部 西洋との出会いと日本人の自覚

- 第五章 日本女性のしぐさへのまなざし — 「手巾」における「型」の思想と演技メソッド
- 第六章 反オリエンタリズムの世界の構築 — 「舞踏会」論

第三部 ロマンとしての物語の追求

- 第七章 「蜘蛛の糸」の童話の世界、または仏教世界(コスモロジー)の芥川の変容
- 第八章 コスモロジーの構造、物語の享受 — 「杜子春」をめぐる

第四部 自己完結の物語 — 物語と作家の伝記

- 第九章 物語作家としての芥川 — 「戯作三昧」をめぐる
- 第十章 ロマンと伝記のはざまで揺れる〈刹那の感動〉 — 「蜜柑」論
- 第十一章 「虚しい」生の終末 — 「玄鶴山房」における玄鶴の表象

第五部 芥川龍之介とプロレタリア文学、その憧憬と限界

- 第十二章 「秋」に見られるプロレタリア文学への憧憬 — 自己犠牲と中流階級との関係

以上の構成を内容に即して説明すると、本論文は、芥川龍之介が、〈物語〉の方法としていかなるものを用いているかということ、そして、自我表出のために、〈物語〉という文学形態にどのような操作を加えたかということの主たる追究課題としている。

第一部は、芥川文学の始発の問題を検討している。そこでは、〈物語〉の方法は、「完結的構造」をとることであるとし、その構造から主題がどのように創出されているかを追究している。そのために、テキストと典拠とされた古典との影響関係についての議論に焦点を置くというよりも、「間テキスト性」という文学理論の概念を用いて、芥川が、典拠となった古典の物語の構成や筋立てを解体し、そこに自身が設定した主題にもとづき、それをどのように再構築しているかを、第一章では「羅生門」、第二章では「鼻」、第三章では「芋粥」、そして第四章では「偷盗」を対象に追究している。その分析から導かれた結論は、芥川は再構築にあたり、人間の普遍的心理を寓意的描写によって語っているということである。

第二部は、第一部で追究した芥川のテキストの「完結的構造」が、「西洋との出会いと日本人の自覚」という主題をいかに取り入れているかを、第五章では「手巾」、第六章では「舞踏会」を分析することで解明している。そこでは、日本帝国主義批判と植民地政策批判にその主題が結びついていることを指摘している。

第三部は、芥川の作品の「完結的構造」を典型的にしめしていると考えられる、童話ジャンルで書いた作品を対象に、その構造がもちうる意味を追究している。第七章では「蜘蛛の糸」を、第八章では「杜子春」を対象に、テキスト外部の〈読者〉や社会的・文化的要素がいかに排除され、ひとつの宇宙観・世界観にささえられているか、そして作品はその構造と結びついて主題やプロットが存在していることを示している。こうした「完結的構造」ゆえに、逆説的に排除されているはずの〈読者〉が、自由に想像力を働かせて作品に関与できることを呈示している。

第四部は、第九章で「戯作三昧」、第十章で「蜜柑」、第十一章で「玄鶴山房」を対象にして、「完結的構造」と芥川の伝記的事実の関連を追究し、テキストには伝記的事実が直接的に反映しているわけではなく、たとえば「戯作三昧」では、馬琴の世界とテキスト外の芥川の世界が〈換喩〉的關係にあることを指摘している。

第五部は、芥川が「完結的構造」としてのテキストを、いかにテキスト外の社会に開こうとしていたかを追究している。そのために、第十二章では「秋」を、第十三章では「一塊の土」を対象にし、芥川が本来の文学を〈プロレタリア文学〉にあるとし、それを憧憬はしていても、社会・政治という物語外部世界を遮断する傾向は棄てきれず、やはり「完結的構造」は崩すことができなかつたと分析している。

結章では、芥川文学は、作家の日常的現実を表象しようとした自然主義リアリズムを採用せず、そのために作品に自己の個人的事実を盛り込むことができなかつたがゆえ、自己完結した「完結的構造」の〈虚〉的世界をつくり出しているという認識から、それゆえ、読者は、彼の個人史と結びつけて主題を読みとらねばならないという強迫観念から解放され、自らの〈知〉を「完結的構造」のテキストに持ち込み、自己の主体性との関連で読むことが許されているとしている。

審査の結果の要旨

本論文は、芥川龍之介の作品群を、「作家論」的立場と「テキスト論」的立場という両極から眺め、その創作の特性をあぶり出そうとした。それが「完結的構造」である。「作家論」は、芥川研究の始発から現在に至るまで「国文学」研究の土壌で中心にとられているものであり、「テキスト論」は、20世紀後半にポスト構造主義として欧米の文学理論の中心をなしたものである。本論文の副題にある「テキスト論と作家

論」の「はざま」とは、20世紀前半に英米文学研究で開発され、日本文学でも一部とりいれられた「新批評」をもとにした「作品論」に接近したものであり、副題で「作家論」と「テキスト論」と時間的順序が逆になっているのは、著者の研究姿勢が、外国人である著者自身の「いま」と「ここ」を研究の始発としているからにはほかならない。

著者には、外国人の自己にとって、芥川作品はみずからのアイデンティティと共通の基盤をもつものではなく、むしろ、異質の基盤にあるという認識がある。言い換えれば、それは「主観」の延長にあるものではなく、なによりも「主体」とは異質の「客観」的な「対象」として位置づけざるをえないという認識に基づいている。このような立場に立つ著者は、自らの外国人としての立場を起点とし、芥川作品を自らのアイデンティティと共通基盤をもつものと扱う日本人研究者の姿勢を批判し、芥川作品にそうしたアイデンティティから排除された異文化的視点からする解釈を容認する研究方法、つまり、芥川文学を日本的土壌に閉じこめるのではなく、世界文学として位置づけ、世界的規模の解釈空間にひらこうとした。本論文の企図と価値はここにある。

本論文は、まず、芥川が〈物語の方法〉としている「完結的構造」が各テキストにおいていかに実現しているかを探り、ついで、読者にとっては、その構造に自己の主体から発するいかなる意味を読み込むことが可能であるかを追究している。「完結的構造」という場合の完結がけっして読者の自由な読みを拒否するものでないことを明らかにするためである。さらに著者は、「完結的構造」を概念化するために、最新の文化・文学批評理論を意識的に用いようとしている。しかし、それは1970年代に欧米でさかんに追究された「構造主義」の理論以降のものであり、著者の批評理論史の地平には、それ以前の批評方法は入っていない。もし、1950年代の「新批評」が意識されていれば、構造の概念化に対してもっと自覚的に「新批評」との関係が考察できたはずである。とはいえ、著者の批評理論意識が、構造主義以降のものとするれば、著者は独自に「新批評」の方法に近いものを発見したといえよう。

ただそこにまた本論文の欠点が認められるわけで、本論文が「新批評」に近い論述を展開していながら、その一方で、70年代以降の構造主義文学理論を意識しているところに、文学批評理論史に関する若干の誤認があり、論述の展開においても、時折齟齬が認められることはいなめない。そこに文学批評理論史に対する著者の認識の甘さが認められることは確かである。著者にはその分野に関する一層の研鑽が望まれる。

それにもかかわらず、本論文を全体的に見るとき、各章のテキスト論はきわめて水準が高く、日本の学界においても新しい知見としてその価値を認められる洞察が多々ある。それだけでも本論文の研究成果を十分高く評価することができる。さらに著者は意欲的に個々のテキスト論を構想的に貫く芥川龍之介の〈物語の方法〉を見いだそうと努めている。それが「完結的構造」という概念である。その概念をめぐっては定義づけにまだ揺れがみられるものの、芥川文学の物語性とは何かを追究する上できわめて先鋭的な概念であることも本論文から理解される。その概念を用いたテキスト論は何よりも研究者自身の〈主体〉の問題を意識化しえていると評価できる。

このようなテキスト論を本論文で貫いたことによって、著者は、芥川研究を世界の場に導く可能性を切り開いたのである。つまり、外国文学研究者が、日本の国文学的研究の呪縛を解かれ、独自の立場で追究する道筋をつけたのである。このことは、本論文がなした、日本国内外の学界に対する最大の業績である。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。